

## 編集後記

本誌は日本の消化器外科医が最も注目し、また最新の消化器外科学の情報を得られる雑誌のひとつであると考えられる。このような雑誌の編集委員を務めさせて頂いて既に4年近く経過した。毎月約10篇の論文を査読させていただいているが、大変に光栄なことである。

ところで最近では英語論文重視の時代で、邦文誌から英文誌へと変更になった日本の学会雑誌も多い。われわれの研究成果を国際的に評価されるには世界で広く読まれる雑誌に英語論文として発表し記録として残す必要があるのは勿論である。しかし日本の医者多くの多くは日本語の論文を読んで医学を勉強しているのだから、何故英語論文を偏重するのか、逆に日本語の論文を業績として全く評価しないのか、常々疑問に思っている。たとえば、一般臨床に携わる日本人の外科医の多くは、手術の前日や術前・術後の管理に日本人の書いた英語論文をわざわざ読んで勉強するわけではない。私の母教室も、最近日本語の論文や国内学会での報告は残念ながら極端に少なくなってしまった。母教室の発展振りを国内学会や日本語の雑誌からではなかなか伺えないので、学会に出席する度に寂しく感じている。このようなこともあって、わが国の外科系の学会における最近の英文偏重・邦文軽視の傾向に対して一言述べさせて頂きたい。

私の施設では毎週月曜日の早朝に外科医が集まって抄読会を行っている。卒後まもないレジデントからベテランの副院長まで全員が毎週二人ずつ交代で、自分で選んだ一篇の英語論文を紹介して抄読する。読まれる論文はほとんどが欧米の施設から発表された論文であるが、レジデントの中には読みやすい英語で書かれているという理由で、日本人が日本の施設から欧米誌に投稿して掲載された英語論文を紹介する場合も時にはある。日本人の英語論文も、世界中で引用されるレベルの高い価値のある論文であることも多いので読破する必要はあるが、わざわざ抄読会で読む必要は少ないと思っている。とくに論文の内容に独創性がなくてしかも国内で全く評価されていない内容であったり、その分野で日本の国内で指導的な役割を果たしていない施設から単にデータを統計的にまとめて投稿しているような論文は、いくらインパクトファクターの高い雑誌でも、抄読会でわざわざ他人に紹介する必要はないであろう。

日本では最近、良質の論文は日本語の雑誌に投稿しないで、英文として欧米の雑誌に投稿する施設が増えている。このことも、本誌や商業誌も含めて邦文雑誌への投稿論文数が非常に減少してきている大きな要因と思われる。勿論われわれの仕事を英語論文で発表し、国際的に認知させる必要はある。ただしインパクトファクターの高い英語論文の論文数が多いことと、国際学会で活躍できることとはまったく別問題である。私見ではあるが、日本の外科医の多くは日本語の論文を読んで新しい外科学の発展を勉強しているのだから、同一の内容でも図表などが同一でなければ、英語論文と日本語論文ではdouble publicationとはせずに、発表を認めてもよいのではないかと考えている。

(小西 敏郎)